

『富士の人穴草子』

—世界遺産富士山の構成資産「人穴富士講遺跡」を描いた物語—

<静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 准教授 田代 一葉>

世界遺産富士山の構成資産の一つ「人穴富士講遺跡」（静岡県富士宮市人穴）は、静岡県富士山世界遺産センターから車で40分程度のところにあります。

人穴浅間神社の境内にある人穴富士講遺跡は、犬涼み山溶岩流内にできた長さ約83メートルの洞穴で、江戸時代には富士講の開祖長谷川角行が修行し入滅した（亡くなった）ことから、富士講の聖地として知られ、信者たちが建立した供養碑や記念碑は現在でも200基あまりが残されています。

この人穴は古くから神秘的な聖地として知られていたようで、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』にも記されています。二代将軍源頼家が、新田（仁田）忠常に人穴探検をさせたというもので、これを基にした物語が『富士の人穴草子』です。室町物語とよばれるおとぎ話などを集めたジャンルに属すもので、室町時代に成立したと考えられています。

あらすじを簡単にご紹介してみましょう。将軍頼家は懸賞をつけて人穴探検をする者を募ります。ただ一人名乗りを上げたのが忠常で、懸賞の領地を子に残すことを目当てに、人穴探検へと向かい、洞窟の中で苦しむ大蛇に出会います。実はこの大蛇は富士の浅間大菩薩なのです。大蛇は忠常が手にしていた二本の剣を欲しいと言い、与えるとすぐさまそれを飲み込み苦しみが癒えると、浅間大菩薩は少年の姿に身を変じ、お礼に人穴の中にある六道を見せてくれました。



『富士の人あな』(国文学研究資料館蔵)

三途の川や針の山、火車や獄卒（ごくそつ）にひかれていく人々の様子など、それらの責め苦を負っている人が前世で犯した罪を聞かされながら、凄惨な地獄を巡っていきます。途中、紫の雲に乗った仏様に導かれて極楽に行く人を見送り、閻魔庁で閻魔の裁きを受ける人々を見て、最後は極楽にたどり着きます。浅間大菩薩からは、ここで見聞きしたことは決して口外してはいけないと釘を刺され、忠常は人穴を出てもとの世界に戻っていきます。



『富士の人あな』(国文学研究資料館蔵)

帰りを待ち受けていた頼家に報告をせがまれ、一度は拒むものの、結局すべてを語ってしまうと、「みづからが有様語らせたるゆゑに、汝をも助けべからず。汝が命を只今取るなり」という声が聞こえ、ついには2人の命は失われてしまうという物語です。

『吾妻鏡』によると、忠常は人穴探検からわずか三ヶ月後に、頼家も一年後に命を落としていて、史実と伝説が相まって、浅間大菩薩の霊異を人々に知らしめていると言えます。

この『富士の人穴草子』は、読めば三度（回数はいろいろある）富士山に登拝したのと同じ御利益があるとされ、江戸時代には富士講信者の中で聖典のように読み継がれていきました。

※人穴富士講遺跡の現在の見学については、富士宮市のホームページなどで御確認下さい。



人穴富士講遺跡

